

日蓮大聖人御書全集

やさぶろうどのごしゅんじ

弥三郎殿御返事

新版
2082
〜
2085

弥三郎殿御返事

けんじ ねん がつ にち さい やさぶろう
建治3年(77) 8月4日 56歳 弥三郎

これは無智の俗にて候えども、承り候いしに貴く

思い進らせ候いしは、法華の第二の巻に「今この三界は」

とかや申す文にて候なり。この文の意は、今この日本国

は釈迦仏の御領なり。天照太神・八幡大菩薩・神武天皇等

の一切の神・国主ならびに万民までも釈迦仏の御所領の内

なる上、この仏は我ら衆生に三つの故御坐します大恩の

仏なり。一には国主なり、二には師匠なり、三には親父な

り。この三徳を備え給うことは、十方の仏の中にただ
しゃかぶつ
釈迦仏ばかりなり。

されば、今の日本国の一切衆生は、たとい釈迦仏に
いま にほんこく いっさいしゆじよう
しゃかぶつ

ねんごろに仕うることに、当時の阿弥陀仏のごとくすとも、
懃 つか とうじ あみだぶつ

また他仏を並べて同じようにもてなし進らせば、大いなる
たぶつ なら おな 持 成 まい おお

失なり。譬えば、我が主の、しかも智者にて御坐しませ
とが たと わ しゆ ちしや おお

を、他国の王に思い替えて、日本国にすみながら漢土・高麗
たこく おう おも か にほんこく 住 かんど こうらい

の王を重んじて日本国の王におろそかならんをば、この国
おう おも にほんこく おう 疎 くに

の大王、いみじと申すものならんや。
だいおう もう

いわんや、日本国の諸僧は、一人もなく釈迦如来の御弟子

こころへ

剃

ころも

き

あみだぶつ

でし

として頭をそり衣を着たり。阿弥陀仏の弟子にはあらぬ

しやかどう

ほつけどう

えぞう

もくぞう

ほけきよういちぶ

ぞかし。しかるに、釈迦堂・法華堂、画像・木像、法華経一部

たも

そうら

そう

さんとくまつた

そな

たま

しやかぶつ

も持ち候わぬ僧どもが、三徳全く備わり給える釈迦仏を

さしお

いっとく

あみだぶつ

くに 挙

ごう

むら

いえ

ば闇いて、一徳もなき阿弥陀仏を、国こぞりて郷・村・家

ひと

かず

おお

た

並

あみだぶつ

みようごう

ごとに人の数よりも多く立てならべ、阿弥陀仏の名号を

いっごう

もう

いちにち

ろくまん

はちまん

う

み

そうろう

一向に申して、一日に六万・八万なんどす。打ち見て候と

とうと

とうと

み

そうら

ほけきよう

ころは、あら貴や貴やと見え候えども、法華経をもつて

みまい

そうら

なかなか

ひび

じゆうあく

つく

あくにん

とがおも

見進らせ候えば、中々、日々に十悪を造る悪人よりも過重

きは、善人なり。
ぜんにん

あくにん

ほとけ

寄

そうら

おも

か

悪人は、いずれの仏にもよりまいらせ候わねば、思い替

へん

ぜんにん

な

ほけきよう

つ

まい

わる辺もなし。もしまた善人とも成らば、法華経に付き進ら

あ

にほんこく

ひとびと

あみだぶつ

することや有りなん。日本国の人々は、いかにも阿弥陀仏

しゃかぶつ

ねんぶつ

ほけきよう

おも

親

こころ

寄

より釈迦仏、念仏よりも法華経を、重くしたしく心よせに

おも

まい

かた

ひとびと

ぜんにん

思い進らせぬること難かるべし。されば、この人々は、善人

に あくにん

あくにん

なか

いちえんぶだいいいち

だいほうぼう

もの

に似て悪人なり。悪人の中には一閻浮提第一の大謗法の者、

だいせんたい

ひと

しゃかぶつ

ひと

ほけきよう

に

まき

大闡提の人なり。釈迦仏、この人をば、法華経の二の巻に

ひと

みようじゆう

あびごく

い

さだ

たま

「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」と定めさせ給え

り。

されば、今の日本国の諸僧等は、提婆達多・瞿伽梨尊者に

す

だいたくんにん

ざいけ

ひとびと

たつと

も過ぎたる大悪人なり。また在家の人々は、これらを貴み

くよう

たも

ゆえ

くに

がんぜん

むけんじごく

へん

しよにん

供養し給う故に、この国、眼前に無間地獄と変じて、諸人、

げんしん

だいかかち

だいえきびよう

せんだい

だいく

う

うえ

たこく

現身に大飢渴・大疫病、先代になき大苦を受くる上、他国

せ

より責めらるべし。これはひとえに梵天・帝釈・日月等の

おん 計

御はからいなり。

かかることをば、日本国にはただ日蓮一人ばかり知って、

にほんこく

にちれんいちにん

し

はじめ

い

い

心

思

始めは云うべきか云うまじきかとうらおもいけれども、「さ

いつさいしゆじよう ぶぼ うえ ほとけ おお

りとして、いかにすべき。一切衆生の父母たる上、仏の仰

そむ わ み おも

せを背くべきか、我が身こそいかようにもならぬ」と思つ

い い にじゅうよねん ところ 追 でしとう ころ

て云い出だせしかば、二十余年、所をおわれ、弟子等を殺

わ み きず こうむ にど なが けつく くびき

され、我が身も疵を蒙り、二度まで流され、結句は頸切ら

にほんこく いつさいしゆじよう だいく 遭

れんとす。これひとえに、日本国の一切衆生の大苦にあわ

か し なげ そうろう

んを、兼ねて知つて歎き候なり。

こころ ひとびと われ おぼ

されば、心あらん人々は「我らがために」と思しめすべ

おん し こころ あ ひとびと ふた あ つえ ひと

し。もし恩を知り心有る人々は、二つ当たらん杖には一つ

か は替わるべきことぞかし。さこそ無からぬ、還つて怨をな

は替わるべきことぞかし。さこそ無からぬ、還つて怨をな

こころえ

そうろう

ざいけ

ひとびと

よ

しなんどせらるることは心得ず候。また在家の人々の能

き

解

ところ

お

でし

くも聞きほどこかずして、あるいは所を追い、あるいは弟子

とう

あだ

こころ得

し

あやま

げん

等を怨まるる心えぬさよ。たとい知らずとも、誤つて現の

おや

かたき

おも

違

の

う

ころ

親を敵ぞと思いたがえて、詈り、あるいは打ち殺したらん

とが

まぬか

は、いかに科を免るべき。

ひとびと

わ

荒儀

し

にちれん

この人々は、我があらぎをば知らずして、日蓮があらぎ

おも

たと

もの 妬

によ

まなこ

いか

のように思えり。譬えば、物ねたみする女の眼を瞋らかし

遊

女

睨

おの

けしき

疎

し

てとわりをにらむれば、己が気色のうとましきをば知らず

かえ

まなこ

い

して、還つて、とわりの眼おそろしと云うがごとし。

これらのことは、ひとえに国主の御尋ねなき故なり。ま

おんたず

もう

くに

ひとびと

た、いかなれば御尋ねなきぞと申すに、この国の人々、あ

とがおお

いちじよう

こんじよう

たこく

せ

ごしよう

まり科多くして、一定、今生には他国に責められ、後生に

むけんじごく

お

あくごう

さだ

ゆえ

きようもん

は無間地獄に墮つべき悪業の定まりたるが故なりと経文

れきれき

そうら

しん

まい

そうろう

おのおの

歴々と候いしかば、信じ進らせて候。このことは、各々、

われ

い

もの

せ

脅

たとい我らがごとくなる云うにかいなき者どもを責めおど

ところ

お

たま

そうろう

つい

ただ

そうら

し、あるいは所を追わせ給い候とも、よも終には只是候

ごぼう

みこころ

てんしやうだいじん

しやうはちまん

わじ。この御房の御心をば、たとい天照太神・正八幡も、

したが

たま

そうら

ほんぷ

たびたび

よも随えさせ給い候わじ。まして凡夫をや。されば、度々

だいじ

臆

こころ

ごうじよう

おわ

の大事にもおくする心なく、いよいよ強盛に御坐します

うけたまわ

そうろう

筋

もう

たも

と承り候と、かようのすじに申し給うべし。

ほつしものもう

と

かえ

もう

さて、その法師物申さば、取り返して、「さて、申しつる

ひがごと

かえ

しゃかぶつ

おや

し

しゆ

ことは僻事か」と返して、「釈迦仏は親なり師なり主なりと

もう もん

ほけきよう

そうろう

と

あ

もう

申す文、法華経には候か」と問うて、「有り」と申さば、

あみだぶつ

ごぼう

おや

しゆ

し

もう

きようもん

そうろう

「さて、阿弥陀仏は御房の親・主・師と申す経文は候か」

せ

な

い

あ

い

と責めて、「無し」と云わんずるか、また「有り」と云わん

きようもんあ

もう

ごぼう

ちち

ににん

ずるか。もし「さる経文有り」と申さば、「御房の父は二人

せ

たま

な

か」と責め給え。また「無し」といわば、「さては、御房は

ごぼう

親おやをば捨すてて、いかに他人たにんをもてなすぞ」と責せめ給たまえ。そ

の上うえ、法華經ほけきようは他經たきようには似にさせ給たまわねばこそとて、

「四十余年しじゅうよねん」等の文もんを引ひかるべし。「即往安樂そくおうあんらく」の文もんにかか

らば、「さて、これにはまずつまり給たまえることは承伏しょうぶくか」

と責せめて、「それも」とて、また申もうすべし。

構かまえて構かまえて、所領しよりようを惜おしみ、妻子さいしを顧かえりみ、また人ひとを憑たの

んであやぶむことなかれ。

ただひとえに思おもい切きるべし。今年ことしの世間せけんを鏡かがみとせよ。そ

こばくの人の死ひとぬるに、今いままで生いきて有ありつるは、このこ

遭

とにあわんためなりけり。これこそ宇治川を渡せし所よ。

うじがわ わた とこ

これこそ勢多を渡せし所よ。名を揚ぐるか、名をくだすか

せた わた とこ
な あ
な 下

なり。人身は受け難く、法華経は信じ難しとは、これなり。

じんしん う がた ほけきよう しん がた
しやか たほう じつぽう ほとけ らいじゆう わ み い 替

「釈迦・多宝・十方の仏、来集して我が身に入りかわり、

我を助け給え」と観念せさせ給うべし。

われ たす たま かんねん たも

じとう 許 め おもむき よ

地頭のもとに召さるることあらば、まずはこの趣を能

よ もう そうろう きようきようきんげん

く能く申さるべく候。恐々謹言。

けん じさんねんひのとうしはちがつよつか にちれん かおう

建治三年丁丑八月四日 日蓮 花押

や さぶらうどのごへんじ

弥三郎殿御返事